

いまと、
これから。

いまとこれから
のとなりの
ための
ボランティア・
地域づくり・
NPOを考える
情報誌

[特集]

Tottori

と と り

と

Tokyo

と う き ゃ う

[特集]

Tottori

と Tokyo

人がいちばん少ないまちと人がいちばん多いまち

「もしも。あの時…。」

誰もが、人生の中であった分岐点を別の方を選んでいたらどうなっていたらと思うをさせるときがあるのではないだろうか。私たちが暮らすこの鳥取は、全国でもいちばん人が少ないまち。その反対でいちばん人が多いまちは、おなじ丁の頭文字のまち「東京」です。もしもあのとき、東京の大学を選んでいたら。そんな選択肢を選んだ経験がある人もいるのではないだろうか。

今回の特集では、鳥取に生まれ育ち「今も鳥取に暮らす3人」と、同じく鳥取に生まれ育ち「今は東京に暮らす3人」に、東京のこと、鳥取のこと、それぞれの選択肢が訪れた時のことを聞きました。今、思いおこしてみると、あなたにとって分岐点だった時を思い出しながら、またはこれからの分岐点を思いながら読んで、そして、同じく分岐点があったであろう友達や家族と話してみたいと嬉しいです。

・・・ CONTENTS ・・・

【Tottori & Tokyo】

*東京の3人インタビュー

・南井優希さん（会社員）

・川戸万葉さん（弁護士）

・千原博子さん（ライター）

*鳥取の3人インタビュー

・福本こずえさん（公務員）

・上山梓さん（地域づくり団体事務局）

・尾崎可愛さん（団体職員）

*インタビュー

「中島さん、10年たって、

どうですか？」

【mini「ラム」】

・いま、これ、ふっく。

・今日も、つまみぐい「いぎす」

【センターのページ】

・理事長紹介「宮本京子」

【高校生ing】

「自分の周りを

ちょっとだけ変えてみた。」



東京は鳥取が
かなり遠い。
鳥取に帰って仕事あるのか
なと揺れました。

一度ここを離れたらもう戻れない。
一概に単純な
幸せじゃない
と思うんです
けど。
最近、政治
の勉強をし
ています。



小中学生の時は日々楽しく、学校から帰ったら近所の友達と遊んだり、中学校からは吹奏楽部に入ってフルートの練習に明け暮れていました。県外を意識し始めたのは高校3年生になってからです。進学を考え始めたときに、「県外に行つてみたい」と思うようになりました。距離的なこともありましたが、「世界的なこともありますが、「世界が違う遠さ」もあります。東京はいい意味でも悪い意味でも刺激がたくさんあつて、頑張れば自分がすごく磨かれていきそうな場所だなと思います。ただ自分の場合、鳥取から離れ過ぎるのは寂しかったので、ちょっとした帰りがしやすい関西で進学を決めました。

大学生活は楽しかったです。ただ、いざ就職の事を考えたときに、「鳥取に帰っても仕事あるのかな。関西にいた方がいいのかな」と考えていました。どっちもいいところ悪いところがあつて、すごく揺れたような気がします。

結局、臨床心理士の資格をとりたくて、大学院に進学することになりました。関西でも良かった

大学受験の時は東京っていうより関西に出たかった。仕事はたまたま東京だったという感じですね。楽天株式会社で働いています。オフィスには一万人近いスタッフがいるんじゃないかな。何にしても、ちゃんと現場に入らないとわからない、単純に外からただ叩いても変わらないという事を今の会社で学びました。

私の周りの子にも多いんですけど、東京で何年も働いて社会にもまれていくと、ここで一生懸命働いていて、私いま幸せなんだって聞いてだす時期があるんですよ。そんな話を聞いているうちに、以前は鳥取で暮らすって全く考えてなかったんですけど、少し考えるようになりしました。今はまだ自分を多少追い込みつつも成長させる時期、社会人としての経験を積む時期なのかなと思つています。

鳥取ってたぶん自分の時間をもう少し大切にしてみたい話なのかな。東京は自分の時間をより仕事に使うような気がします。

自分の知らないことを学んで、それをちゃんと自分の仕事に活かせたとき本当に楽しくて。一

なのですが、島根でも資格を取れることを知って、「鳥取にも近いし」ということで島根の大学院に通い始めました。

それから実習などで鳥取県の特に西部に行く機会が増えてきて、その頃から改めて鳥取の良さに気付き始めた気がします。それがきっかけで地元に戻つて就職しようという気持ちが強くなりました。今は、鳥取県庁の福祉職で、児童相談所などで勤務しています。

私にとって鳥取は「ふるさと」と言つてしまえばそれまでですが、「自分を育ててくれて、何らかの形で恩返ししたい」と思える場所でもあります。

「恩返し」に向けて、昨年末から友人達と「TUBELab」という団体を立ち上げて活動を始めました。私の夢はこの活動の中で、鳥取の子ども達を対象にダンスのワークショップを開催することです。自分の好きなダンスを通して、働く以外の形でも鳥取に恩返ししていけたらと思つています。

帰る場所があるから、
東京で戦えている。



鳥取は、「恩返ししたい」場所。





友達もいるし、鳥取でずっと暮らすんだろーなと思っていました。すごくいい意味でポジティブに住んでいる感じ。

こういう風に生きていきたい、と思える人が地域の中にいます。



やっぱり東京がいいかなと思っただんです。誰もが活躍できる社会に貢献したい。

弁護士として働いていて、今、4年目。

高校生まで県外に出たいという気持ちは全くなかったです。鳥取大学で県外出身の友達と過ごす中で、外の世界の方が面白そうかと思っていた時期はありますね。でも3年生で芸術社会学の先生に出会って見方が変わりました。自分の住んでいる町でなにかを積み重ねていく方が面白いなと。もちろん外の世界も面白いけども、結局どこであつても、それぞれ特色はあるにしても、やることは同じじゃないかと思うようになりました。

鳥取市出身で、大学3年生の時に湯梨浜町に移住して、「たみ」というシェアハウスに住んでいました。今は町内の他の所に住んでいます。移住者なのでゼロからの関係づくりなんですけど、この町は受け入れてくれる感じがします。大学生までは実家で、窮屈で正直、実家周辺は嫌いだっただけです。それがたぶん松崎来てからかな、良さも悪さも含めてちゃんと見えるようになってきました。

こども園に行ったり、小中学生の宿題をみたり、塾の先生や

司法試験が終わった後、修習期間というのがあつて一時鳥取に帰ったのですが、思ったほど楽しくないなと。車が運転できないと不便だし、なにより友達がほとんど東京とか大阪に出てしまつていたので、就職が決まっただけで、それから東京です。

相続と離婚は継続的に担当しています。それ以外にもいろいろな仕事があります。やりがいがあります。たぶん事件の性質はどちらも変わらないと思うので鳥取に戻つてやってみたくも思います。そもそもこの仕事に就いたきっかけは、大学生の時に鳥取に戻つて働くためには手に職がある方がいいかなと思つて。大学2年生の時になろうと決めただけですけど、その時鳥取県には女性弁護士は1人とか2人とかそんな時代だったので、私が戻つてやりたいなと思つていました。そうしてる間に増えたみたいなので、急いで戻らなくてもいいかもしれないなと。

仕事で離婚を扱つていて思うのは、今の社会はいろんな面で女性が我慢しなきゃいけないです。女性だけに限らず、い

地域づくりのプロジェクトチームの事務局などいろいろなことをしています。自分のライフワークはもう少ししっかり描きたいと思っています。特に子どもを取り巻く環境、子どもたちが自由に生きられる環境づくりに関心があります。

自分でなにかを作らなきゃいけないって思っていたんですけど、そうじゃなくて一緒にやればいいんだ、と。

幸せは他のところにはないですよ。すごく楽しく暮らしていて、幸せです。この直売所「うめや」は週1回開けていて、近所のお年寄りがやってきます。皆ボランティアで利益は求めていなくて、自分が楽しいなと思つてやつてる。さつき外を歩いてたおばあちゃんは耳が遠くて大声じゃないと聞こえないんですよ。昔は話さなかったんですけど、ここにきてからすこい笑うようになって。笑顔がカワイイんですよ。本当に。

先月結婚式を挙げました。彼の友達など知り合いが増えてプライベートが充実して楽しいです。私はほつておいたら仕事ばかりしているの。

苗字が変わると仕事上でも不都合なことがあるので入籍を先延ばしにしましたが、先日入籍しました。

東京は楽しいところかもしれないですけど、安住の地ではないと思っています。仕事もあるし、友達もいるし、そういったコミュニティはあるんだけど、なんかこみこみしているし。ご近所付き合いはあまりないですね。老後は鳥取で暮らしたいです。



自分でなにかを作らなきゃいけないって思っていたんですけど、そうじゃなくて一緒にやればいいんだ、と。



鳥取は、戻れる場所。最終的に受け入れてくれるところ。



尾崎可愛

4 0 代 ・ 団 体 職 員

東京に進学してからはダンススクールにも通っていましたが、海外への憧れもあって、卒業後約2年間ニューヨークのダンス専攻がある大学へ留学しました。高校時代からマイケル・ジャクソンのライブや他にも様々なアーティストのライブに足を運んでいたんですけど、この頃から徐々にダンスから音楽へと興味の中心が変わっていききました。帰国後は音楽関連の仕事をしたいと思っていましたが叶わず、大阪のテレビ局に就職。その後、東京の音楽産業・文化振興財団に転職しました。帰国してから作詞に興味湧いて

私にとって鳥取とは「切っても切れない場所」です。それはマイナスなイメージではなく、「切れない」というより「切りたくない」という感じです。例えば東京や、ニューヨークにいようと、そこは第二の故郷にしかありません、家族がいて生まれ育った場所、第一の故郷は鳥取しかありません。鳥取に貢献なんて大きなことはできないかもしれませんが、出来る仕事を一つでもこなしていけるよう精進していきたいと思っています。



私にとって鳥取とは「切っても切れない場所」です。

鳥取にはバレエ以外のダンス教室がなくて。東日本大震災の4か月後、鳥取に戻りました。

海外への憧れ、ダンス、音楽。

東京暮らしは実家のある鳥取での生活より長くなっただけかもしれないですね。

鳥取で撮影された古い写真を集めています。

いろんな仕事をしているんですけどね。たまに鳥取のことも書いています。前に働いてた会社から仕事をもらったりということもあるし。結婚してからフリーランスになったんです。東京は、そういう意味ではいろんな人と出会う機会が多いので、仕事もつながりやすいかもしれないですね。昭和初期頃の写真を集めています。梨狩りにバスで人が押し

きて、独学で始めて、今もセミプロ的に作詞をしています。5年半ほど東京で働いた後、突然鳥取に戻りたくなりました。きっかけは自分でもよく分かりません。したいことがあったわけではないのですが、作詞を続けながら、鳥取で就職活動をしました。その時に今の職場であるとつとり県民活動活性化センターにご縁をいただき、初めは「NPO? 地域づくり?」という感じでしたが、今は日々市民活動について学びながら仕事をしています。



千原博子

3 0 代 ・ ラ イ タ ー

ちょうど半分くらいかな。就職してからはそんなに帰ってなかったんです。高校生の頃はとにかく出たいと思っていて、東京の方が楽しいと思っていて。それが少しずつ、鳥取に帰りたいなという気持ちが大きくなってるんですよ。東京にも住みたいけど、鳥取にも住みたい。最近鳥取に帰る頻度を多くしようと思っています。鳥取っていいところだなというのが見えてきました。打吹公園に散歩に行ったりして、ぼーっとできる時間がありがたいなと思うたり。あと家族や兄弟や友達と何気なくご飯食べに行ったりとか、そういうことだけでもなんか幸せ。

倉吉市内に母がコミュニティスペースを作りたいと言っていて、それは聞いていたんですけど、地震の際に被害を受けてどうしよう、となったんですね。私も手伝えることとは思って、クラウドファンディングを活用して修理費用を集めることになりました。倉吉で過ごしたことがある方やお世話になった方、新聞を見た方、いろんな方がメッセージをくださいました。みんなが大切に思ってくれているというのがとても嬉しかったです。今暮らしにくいなくても、鳥取のためにできるんだつたら何かやりたいという人は多いと思います。

鳥取は、帰る場所。



特定非営利活動法人 **鳥の劇場**

演出家・鳥の劇場芸術監督

中島 諒人

中島さん、 10年たって、 どうですか？

東京から鳥取に戻り、鳥の劇場を立ち上げられた
中島さん。あれから10年。今の心境を聴きました。

れ、手応えがある。失敗とか反省も含めて少し返りがある。それを使ってまた次の出来事を起こすということを繰り返しています。

返ってくるものの反応とか手触りとか手応えとかを一つ一つ確かめながら？

まずは得られた信頼が財産です。実施を通じて人間関係が増え信頼が増していく。その中で次の事業のあり方を決めていく。一つ一つがそれぞれ発展していくこともあるし、掛け算できることもある。東京や海外から何かを持ってこようと思いつくこともある。我々にとっては事業が商品ですから、どうやったらユニークなものにできるかです。それから、もう一つ大事なことがあって、我々の商品はみんながパッと飛びつきやすいものではありません。意味をわかりやすく

2006年に鳥取市鹿野町内に鳥の劇場を立ち上げて10年。

そもそも、鳥取でやろうと思われたのはどうしてだったのでしょうか？

その時40歳だったんです。人間やはり40歳くらいまでに身に付けたことで、人より比較できること、自分にとってはそれが演劇なんです。それでなんとか食っていけたら一番いい。それだとすると、まずは場を持つとうと思ったんです。

その「場」を鳥取に作るうというのはいちいち試みかなと思ったのですが。

劇場というのは、日本では圧倒的に都市型です。国によって違うんですが、アメリカだと商業的位置づけのブロードウェイと、もう少し社会的な位置づけのリージョナルシアターといわれる地域の劇場が両方あります。劇場活動の構想を作る際に問題意識にあったのは、この情報誌も同じだと思いますが、地域がこれからどうやって自立的に生きていくかです。どうやって自分たちなりに

言語化していかなくやいけない。「この事業は未来のためにこういう意味があるんです」ということを一生懸命発信していくことで少しずつ理解者が増える。鳥取県の特徴は、その輪の広がりの中にいろんな種類の人がいるということだと思います。絶対数は多くなくてもうろんな人が入ってきてくれます。

関わらざるを得ないという場合もあるし、一人が何役もしているというところはありますか？

一人が複数の顔を持つのがいいんです。人間は本来的にそういうものです。鳥取の良さは、みんながいろんな顔を持ちながら、時にリーダー、時にフォロワーとして、いろんな役割を複数こなしていくこと。それからもう一つは、アートな人多くの人々がこれまであんまり興味を持たなかった分野なども含みながら、様々な活動が進んでいる事です。それらがうまく鳥取の力になればいいんじゃないかと思っています。

高度経済成長の物質的

コミュニティをつくって、充実して生きていけるか、その課題と劇場活動をリンクさせられるかを考えました。

市場の中で生き残れるものだけが価値あるものだという考えを、生活全領域に及ぼし市場によって社会を回していくという発想が、新自由主義です。鳥取は人口も少なく強い産業もない。そうした中で、演劇は人と人が出会うものであり、劇場は生身のエネルギーをやり取りする場であるということが、大事だと思いました。自分たちのコミュニティとか、自分たちの未来とか、そういうことについて考えていく場としての劇場ができればいいんじゃないか。市場万能主義によつては作れない価値を劇場が作れると思うたんです。

鳥取に都市型ではない劇場を作り始められた際に何か特別なことを取り入れたりされたんですか？

例えばヨーロッパのように地域での劇場の役割が確立しているところだと、

な充足を通過して、様々な課題が山積している今、この社会のあり方についての。人間がより良く生きるとはどういうことか、幸せとは何かを考えるを得なくなってきたということです。その中で、アートを社会の中でうまく生かして、新しい価値＝幸せを発見し社会を変えていくことにしたい。

10年間で中島さんが変化したことはありますか？

自分にとって演劇が一番大事なものだということは変わりません。が、演劇に「何か」を掛け合わせることに対してためらいがなくなってきました。ゴシック体の「芸術」へのこだわりがいい意味で緩くなってきた。逆に言うと、演劇表現が作り出す関係性に対して信頼が増した。いろんな人の心の動きや心のつながりを、演劇や劇場は作ることが出来る。演劇の深い可能性を知り、それを生かすための専門性を高めることが出来たと思っています。

もう一つは、みなさんが

劇場の仕事の領域が決まっている。けれど一方、私たちの社会の場合は、そもそも劇場の仕事が何かという定義もない。劇場は芝居をやる場ですが、それだけでは芝居に関心のある人しか来てくれない。社会的な出来事、社会的な存在にはならないです。やれそうなのはなんでもやろうということで、学校でのワークショップなんか押し売りのな感じで始めました。地域の行事にも積極的に関わりました。鳥の演劇祭は2008年から始めたんですが、自分たちも地域の人たちも、やってみることで演劇祭というものを理解しました。どんなことも実際にやってみて得られる手応えを元手に、次に進みました。私はNPO活動はベンチャーだと思っています。ベンチャーは持っているものが少ない。お金も、人的資源もアイデアも豊富ではない。ただ強い思いと、突出したアイデアはある。それをともかく具体化する。やってみると、口だけで言っていた時とは違う反応が周りから得ら

10年間で鳥取が変化したと思うことはありますか？

アート活動が全般的に盛んになったと思います。ただ、これは自戒も込めてなんです。どこかで行われているイベントのマネ、借り物にならないようにと思います。多くの人に広げるためにはフアッション化も大事だけど、本当の意味で考えられた試みになっているのが大事です。

今後の予定を教えてください。

より多くのお客さんにみてもらえるように今後も頑張っていこうと思っています。教育との関わりも深めていきたい。2017年は中国でも公演します。障がいという壁をこえてみんなが演劇創作に取り組む「じゅう劇場」は、フランスでも公演を行っています。



公益財団法人

とっとり県民活動活性化
センター

理事長

宮本 京子
MIYAMOTO Kyoko



これまでの経歴は？
私は、県職員として38年間勤務しました。その中で農林水産部の仕事が一番長く、出発は生活改良普及員という仕事でした。農家の方に寄り添って農家生活の改善を行う仕事をしていました。農家の立場に立って、時に客観的な目で見ながら、一緒に課題を解決していく、非常にやりがいのある仕事でした。今のとっとり県民活動活性化センターと仕事の内容が共通する部分がありますね。「寄り添って解決し

ていく」、「目立つことなく、黒子のような役割」です。なので、今の活性化センターをみていると当時の「情熱」がふつふつと湧き出でてきて、「もっとこうすればいいのに」とつい思ってしまうことも多々あります。

センターが担うべき役割とは？
伴走型支援、これに付きまいると思います。いかに地域に密着してやっていくのか、講座の開催といった事業だけでは支援の幅に限りがあります。地域に入り込み、寄り添って各地域、団体の方々に支援していくことが大事だと思います。そのためにもまずは「信頼関係」、これがないと支援

はできません。そのために毎日ごろから地域の方々と「信頼関係」を築いていくように努めなければなりません。また、当然ですが支援をしていくにあたり、職員一人一人の支援の能力を高めていく必要もあります。

やらねば
地域づくり、ボランティア、NPOなどの市民活動は今後さらに、活躍が期待されていきます。そうした活動が県内でも増えてもらいたいと思っています。「こんな地域活動をやりたい」ということがあれば、気軽に活性化センターに連絡をして活用していただければと思います。

とっとり県民活動活性化センター理事紹介

地方の衰退がいわれて久しい。片や東京圏も将来、高齢者人口に対して、介護人材が不足し、介護難民が発生するという。私たちが暮らす地域の将来について、どんなイメージをお持ちだろうか。この本は、岩手県紫波町のオガールプロジェクトの始まりから現在までを綿密な取材に基づいて伝えている。紫波町は公民連携という新しい手法で塩漬けされていた駅前広大な町有地を再生させたことで全国的にも有名である。

置いたり、農家にスポットを当てた展示を行ったりと、地域の特性を生かした活動を行い、図書館関係者の評価も高い。しかし、同書にはもちろん、図書館のことが書いてあるが、主題はあくまでも「まちづくり」だ。専用バレーボールコート建設、ライフスタイルのデザインなど、特徴はいくつもあがあるが、想いは「地方って、東京の真似する必要はなくて、自分たちがどういう暮らしをしたいかということ」をベースにまちづくりをしていけば、トップランナーになれるんです。それが本当の自治です」(本文まま)に集約される。どう受け止めるかは、私たち次第だ。

岩崎武史(鳥取県立図書館 司書)
鳥取県立図書館 <http://www.library.pref.tottori.jp/>
〒680-0017 鳥取市尚徳町 101
電話 0857-26-8155



まちの未来をこの手でつくる
紫波町オガールプロジェクト

猪谷千香 (著)

出版社：幻冬舎
ISBN-10：4344030095 ISBN-13：9784344030091

今日も、つまみ。!



その4
「いぎす」。

鳥取県中部を中心に昔から食されている伝統の味「いぎす」。皆さんはご存知でしょうか。一体全体どんな食べ物？と思う方も少なくないかも知れません。言葉の響きから想像するのは難しいこのいぎすの正体は、実は海藻。いぎす草という海藻と水だけが原料のヘルシーフードなのです。このいぎすを扱うお店、その名も「いぎす屋」さんを訪ねました。お話を伺ったのは、伊田久美恵(いだくみえ)さん。10年ほどこのお仕事をされているそうです。

いぎす屋さんの作業内容はいたってシンプル。漁師さんから仕入れた乾燥いぎすのゴミを丁寧に袋に詰めて売ります。これが一つ。そしてもう一つは洗ってゴミをとって水で煮て固めて売ります。これは寒天と同じで火にかけて混ぜると溶けてどろっとするいぎす草の成分を利用したもので、最後にバットに取って冷やして固めて切って完成。これがお惣菜コーナーに並びます。

「箸やすめの存在かなあ」という伊田さんの言葉の通り、酢味噌や生姜醤油でさっぱりいただく喉ごしの良いこのいぎす。夏場は需要が多く、とても忙しくなると言うのも聞けます。

食事中、ちらっといぎすを見て、次はいぎすだな、と思いながらお肉やお魚を味わう。決してメインにはならないけれど、食卓があると安心する存在なのかもしれません。いぎすの正体、それは頼もしい脇役、と言ったところでしょうか。

Vol.07

自分の周りを ちよつとだけ 変えてみた。

今回は鳥取県中部を中心に学校、年齢を越えて「じゃべりあう」場をつくろうと奮闘している倉吉東高校3年生の衣笠さんをご紹介します。

自分が住んでいる社会や地域に興味を持ったのは両親の影響が大きいと思います。小さいときから母親や父親が地域で活動しているのを見て「かっこいい」と思っていました。それから、一番大きかったのは留学を経験したことです。ドイツに1年間留学していたのですが、日本と考える方が全然違ふんです。

その一つが「自分たちが住んでいる社会、地域」に対しての考え方です。ドイツでは同年代の子達が、「自分たちの住んでいる社会、地域をより

よくするには」について、本気で考え、時に行動まで起こしていました。日本では「自分では何もできない。できるわけない」、どこか「人任せ」の感がありますよね。自分も留学するまではそうでした。でも、ドイツで「自分でも少しは社会や地域をよくできるんだ」と感じる事ができたんです。

この留学での体験から、日本に帰ったら「何か自分の周りが少しでも変わることをしよう」とずっと考えてました。その一つが「トリートーク」です。内容はシンプルで、4〜5グループに分かれて、テーマについて「気楽に、自由に」しゃべるだけです。それを2〜3回、メンバー、テーマを変えて行うというものです。

これをやろうと思ったのは、ドイツでは常に自分の意見を持って周りと話すことで、新たな気づきや学びを得ることが多くあり、自身の成長に繋がりました。日本だと自分の

意見はあまり言いたがらないですが、しゃべることで色々得るものがあります。日本の友達にもこのことを体験して欲しいと思いました。また、地元・地域の良さの再発見につながったり、学校間同士の交流がないので、学校の枠を越えて交流できたら面白いなという思いもあります。

「トリートーク」を通して、ほんの少しだけですが、自分の周りが変わり始めたかなと感じることがあります。それは、先輩たちが「引き続きやりたい」と言ってくれていることです。とはいえ、なかなか一歩が踏み出せない様子なので、卒業するまでにもう一度「トリートーク」を開催したいと思っています。ただ、その際は自分はいくまでサポート的なサポートする立場で関りたいと思っています。やりたいという先輩がいる限りは活動を続けていけるように、卒業後もサポートできたらと思っています。



衣笠慶子

きぬがさ

けいこ

さん

鳥取県立倉吉東高校（3年生）

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：宮本京子 編集人：毛利葉

取材・編集：寺坂純子、椿善裕、池淵菜美、谷祐基、尾崎可愛、世瀬あけみ、
上山梓、谷まゆみ、小谷真之介、梅野みぎわ

デザイン：石原達也 写真：市川貴美江

お問合せ：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

〒682-0023 倉吉市山根 557-1 パープルタウン 2 階

TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470

E-mail info@tottori-katsu.net URL <http://tottori-katsu.net/>

【編集後記】

「東京」は私の生まれ故郷。都市化がすすむ新興住宅地であったが、空き地の原っぱや秘密基地をつくった鎮守の森で日が暮れるまで遊びまわっていた武蔵野の夕焼け空は忘れられない。「鳥取」は思春期を過ごした第2の故郷。つらいとき、心がモヤモヤしたときには一人で浜によく出た。海から聞こえる波の音は体全体を心地よく叩き続け、心は次第に落ち着いていった。さびしい海はさびしい心を癒してくれた。

今回の特集は「鳥取」と「東京」だったが、暮らす場所を「選ぶ」ことができるということは幸せなことだなと感じた。その人の「かけがえのない個性」が輝くための「かけがえのない地域」を今ここでつくること、それが私たちのめざす“自治”というもののなのかもしれない。

（毛利葉）